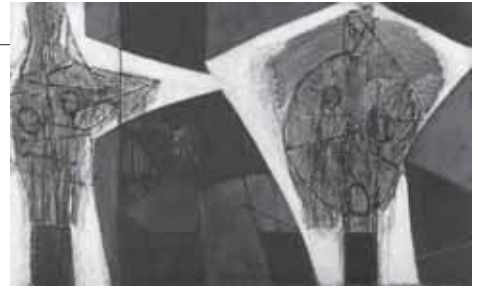


三岸節子 マチエールの魅力

三岸節子の作品の特徴のひとつに、独特のマチエール(油彩画の表面の肌合い、質感)があります。この展示では、感性と技術に支えられたマチエールの魅力に迫ります。

さまざまなマチエール

マチエールとは、美術分野の専門用語のひとつで、絵の具などの描画材料のもたらす絵肌(絵の表面)のことを指します。節子の初期作品は絵の具が薄く塗られるものが多く、《静物》(No.3)では、鮮やかな色彩の描線がかすれ、キャンバスの目が見えそうなほどです。一方、絵の具を厚く塗り重ね、素材の材質を表現した作品も制作しています。《二つの像》(No.9)ではモチーフである埴輪のざらざらとした質感が、《トンネルの白い川》(No.14)では川沿いに建つ建物のごつごつとした壁面の質感が、そのまま絵画の上に表れています。軽井沢の別荘で描いた《火の山にて飛ぶ鳥(軽井沢山荘にて)》(No.10)は、絵の具に砂を混ぜ、それを塗り重ねては削り取ることによって、今までにない荒々しい筆致となっています。この頃の節子は、ひとり別荘にこもり自らを追い詰めるかのように作品制作に没頭していました。岩肌のようなマチエールには、自己や作品制作に対する激しい葛藤が表れているかのようです。



《二つの像》 1959年 ©MIGISHI

抽象におけるマチエールのあそび

《カーニュ風景》(No.11)は、フランス、カーニュの街並みを幾何学的に描いた作品です。色彩で描き分けられたモチーフは、よく見るとマチエールによっても描き分けられています。《作品I》(No.16)は、黄、黒、紫などの四角形が重なり合った、節子作品の中でも珍しい抽象画のような作品です。ナイフで伸ばした絵の具の上からひかくように線が引かれており、マチエールの上でも様々な表現が試みられていることがわかります。《作品II》(No.18)、《小さな村》(No.19)など、一見抽象画に見える作品には、そのマチエールに節子のこだわりを見ることが出来ます。



《作品I》 1985年 ©MIGISHI

花とマチエール

まづ下塗り。これは白いキャンバスに、青や黄や緑、赤など、何枚でも興に乗じて、変化をもつたマチエールで色をおおっていきます。第二は花の骨格。コンポジション。(中略)花の形、壺の模様、空間の領分と。この最初の段階が完全にかわいたとき、マチエールをつくる操作にとりかかります。(注1)

このように、花の制作におけるマチエールについて節子は語っています。最晩年の花の大作《さいたさいたさくらがさいた》(No.23)は、亡くなる前年、93歳のときに、腕に巻きつけた布に絵の具をつけて描かれました。もはや絵筆を持つ力さえなかった節子ですが、うすい絵の具を幾重にも塗り重ねることで、他の作品には見られない絵の具の層ができ、独特のマチエールを形成しています。絵肌に滴る油の跡からも、この作品にかけた作者のただならぬ思いが伝わってくるかのようです。



《さいたさいたさくらがさいた》
1998年 ©MIGISHI

◆新収蔵作品《貝谷八百子氏肖像画》

本作品は、昨年の秋に寄贈を受けた新収蔵作品となります。モデルとなったのはバレリーナとして活躍していた貝谷八百子で、節子は東京都中野区鷺宮のアトリエに彼女を招き、肖像画を制作しました。これは、雑誌『週刊朝日』上で1957年に行われた“第7回表紙コンクール「日本の女性」”という企画に合わせた作品であり、同年3月17日号の表紙を飾りました。企画は、節子を含む15人の画家が描く表紙絵に、読者が人気投票を行い、参加した読者へ抽選で表紙原画が贈呈されるものでした。寄贈者はみごと原画に当選し、以後60年間、大切に保管を続けてこられました。作品では、鮮やかな赤と黄の洋服姿の貝谷が描かれ、バレリーナである彼女の華やかで凛とした佇まいがよく表現されています。絵の具は全体的に薄塗り、斜めに線を引いたパステル画のような軽やかな筆致は、貝谷の雰囲気や柔らかさ、明るさを描いているかのようです。節子がある個人の肖像画を描くことは珍しく、画業においても貴重な作品です。



《貝谷八百子氏肖像画》 1957年 ©MIGISHI

(注1)三岸節子『花より花らしく』求龍堂、1977年